

《2009年11月例会報告》

【日 時】2009年11月26日(木) 19:00~21:00 その後同会場にて懇親会

【会 場】神戸レガッタアンドアスレチッククラブ (KR&AC)

神戸市中央区八幡通 2-1-20

【テーマ】記者として、サッカー人として 大谷四郎

【報告者】賀川浩(サッカーライター)、黒田和生(ヴィッセル神戸)

【参加者(会員) 10名】

阿部博一(日本サッカー史研究会)、牛木素吉郎(ビバ!サッカー研究会)、貞永晃二(サッカージャーナリスト)、高田敏志(町田高ヶ坂 SC コーチ)、高原渉(宝塚 Jr.F.C.)、中塚義実(筑波大学附属高校)、根本いづみ(フリーライター)、福西達男(ポルベニルカシハラ)、本多克己(株式会社シックス)、宮川淑人(枚方フットボールクラブ、関西クラブユースサッカー連盟理事長)

【参加者(未会員) 36名】

青山隆(二水会 ※賀川紹介)、今西和男(F C岐阜 ※賀川紹介)、岩谷淑子(岩谷俊夫氏夫人)、上田亮三郎(大阪商業大学サッカー部総監督)、大谷薫平(大谷四郎氏ご子息)、大谷福子(大谷四郎氏夫人)、岡俊彦(神戸F C)、草葉達也(ライター ※本多紹介)、倉井三郎(元奈良県協会理事 ※賀川紹介)、佐藤英雄(ヴィッセル神戸 ※牛木紹介)、砂田純二(岩谷俊夫氏ご子息)、高山哲郎(元国際審判員 ※賀川紹介)、田村憲一(サンテレビ)、永田淳(フリーライター)、根無陽介(※本多紹介)、則岡弘士(神戸F C)、備前琢暢(※本多紹介)、廣田景一(NPO 法人レーヴェン理事、神戸国際大サッカー部監督)、藤田淳(朝日新聞スポーツ部記者 ※賀川紹介)、細谷一郎(神戸F C副理事長)、前野正(神戸F C理事長)、宮野哲弘(神戸F C)、宮本亮(神戸F C)、向井清之(神戸一中、大谷四郎氏後輩 ※賀川紹介)、山元亮(神戸F C)、北川貞和(西神戸F C)、喜田充(西神戸F C)、松田久、倉直樹(神戸F C)、重岡耕太(神戸F C)、安部井雄太(神戸F C)、尾崎龍一(神戸F C)、木村三千雄(神戸F C)、日向寛峰(神戸F C)、重松良弘、安東寿人(ヴィッセル神戸)

【報告書作成者】貞永晃二

注1) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

記者として、サッカー人として 大谷四郎

賀川浩(サッカーライター)

<目 次>

1. 賀川浩： 神戸一中、新聞記者の後輩から見た大谷さん
2. 黒田和生： 神戸FCでの弟子から見た大谷さん

1. 賀川浩： 神戸一中、新聞記者の後輩から見た大谷さん

大谷四郎さんについて語り合いたいということで案内を差し上げたら、ずいぶん多くの、しかも各活動でご活躍の方々が集まって頂いて、感謝しています。大谷さんの奥さんもこちらにみえていますのでまず、夫人に関わる話からすると――。

大谷さんの奥さんは、お父さんが朝比奈先生という東大の薬学の大先生で、かの有名なサッカーの神様・竹腰重丸が、東大の薬学部に入ったときの先生でした。ノコ（竹腰）さんは外国遠征についていったりしますから、東大で授業にちゃんと出られなくなった。で、叱りつけられたのが、大谷ふくこさんのお父さんの朝比奈先生。そこから、そんなに難しい化学の方はやめて、農業経済の方に転向した。竹腰重丸先生はサッカーを心おきなくやれるようになった。日本サッカーの発展の元、1つのきっかけのときに、朝比奈教授がいらしたからということになっております。これだけちょっとご紹介しておきます。

大谷四郎さんは、今度（日本サッカー）ミュージアムの（日本サッカー）殿堂というところに殿堂入りということで、表彰されたわけです。その時に後ほどDVDで出てくると思いますけど、表彰の式典があったときに、協会はDVDをちゃんと作ってくれまして、皆さん方のやってきたキャリアを紹介してくれるんですが、総裁である高円宮妃殿下がお話をされたんです。そのときに妃殿下は、非常に格調のあるいいお話をされたんです。

「殿堂の大きな額がミュージアムの地下の廊下に置いてあります。その銅板を眺めていると、その一人ひとりの先輩方のサッカーの人生が1冊の本になっても書き足りないだろうと思えるほどの仕事をしてこられた人だ。そしてここに表彰されて掲げられている沢山の先輩方だけでなく、この人たち以外にもまだ沢山の先輩が今日の日本サッカーを作ってきたんだということを、殿堂の掲額の通路を歩くときにいつもそういう風に思う」と実に心のこもった挨拶を妃殿下がされたのを覚えております。その通りでありまして、大谷四郎さんの70何年間のサッカー人生を語るとなれば、本が何冊あっても足りないし、大谷さんの書き物を紹介しようと思えば、

藤田さんを前にして悪いけど、昔は朝日新聞の記者はあまり原稿を書かなんですね、でも大谷さんはずいぶん原稿を書いておられるから、それを皆さんにお見せするだけでも大変なんで、そういうことを考えれば、わずかな時間で大谷さんを紹介することは非常に難しいことではあります。まず私は中学校の後輩で、新聞記者の後輩でもあります。実は新聞記者になるきっかけも大谷さんです。僕が戦争が終わって京都で、もう学校もやめて特攻崩れでぶらぶらしていたときに、大谷さんが何かの折に、君ね新聞記者もいい商売だよ、という話をされたのが心に引っかかったのです。それから、産経新聞へ入った1つのきっかけです。入ったときに、大谷さんが僕に言ったのが、君の性格やったら、なんでも引き受けて仕事するけど、あんまり仕事しない方がいい、なんでも引きうけない方がいい、自分のやりたいことだけをやりなよというのが教えでした。残念ながら私の場合は自分のやりたいことだけをやっているわけにはいかないので、なんでもかんでもやってきて、大谷さんとは全く違うやり方の記者人生を歩んだわけです。記者人生に多少の違いはありましたが、大谷さんは私にとって心の中にずっと残っている先輩であります。

それで、大谷さんについて説明しなければいけないわけですが、まず選手としての大谷さん。御影師範付属小学校ですから、御影師範付属を出れば神戸一中へ入ってくれば大体サッカー部と、あるいは雲中小学校を出て神戸一中へ入ってくればサッカー部というのが、昭和の初めごろの習慣みたいなものでした。なにしろ大谷四郎氏の6歳上（の兄）に大谷一二（いちじ）というサッカーの名選手がおられたんですけども、その人が小学校の5年か6年のときにチョウ・ディンが御影師範でサッカーを教えているのを見たというのが、大谷ワンツーさん、一二さんの話でございます。

当然御影師範のチョウ・ディンのサッカーを倣って、ある程度技術的な体系もできて、子どもたちにもそういう教え方をし始めた。その時期に当たったのが大谷四郎さん辺りからの選手だと思えます。

大谷さんは3年生から試合に出ていますけども、4年と5年のときに全国優勝しました。4年のときはかの有名な慶応の黄金時代を築いた二宮洋一、笠原隆、津田幸男、そういうメンバーで、大谷さんは1年下、4年で左のウイングで試合をしています。5年生のときはセンターフォワード（CF）で試合をして全国大会で優勝しています。

ここにおられる向井さんと一緒にウチの兄貴（賀川太郎）が昭和10年（1935年）に入ったときに、大谷四郎氏はちょうど5年生でしたから、賀川太郎、向井清之という僕らより2年上の人たちは当時1年生だったわけです。当時、兵庫県には1年生大会というのがありまして、小学校出て入ってきて、5月か6月に旧制中学校の試合がありました。そこへ出てくるのは、1年制のときから、必ずしもサッカー部に入っていないなくても、御影師範付属や雲中小学校でサッカーが上手かった連中は雇われて出たりしてるんです。雇われてるいうと語弊がありますけど。その時にも野球部には上手いのがいましたから。僕はその試合を見に行き、向井さんがセービングで横とびに跳んでボールを止めているのを神戸三中のグラウンドで見たのをいまだに記憶しております。それで新聞記者になる素質があったのかもしれませんが。

兄貴が神戸一中に入ったものですから、我が家も好むと好まざるに関わらず、サッカーに引きずられて見に行くようになりました。そこで5年生の大谷さんのプレーを子ども心に覚えております。背が高くてスマートで、当時は2バックですからロービングセンターハーフがCFをマークするというのではなくて、どちらかのバックがマークする形ですから、得点の多い試合でしたですね。4-3とか5-4とかいう試合がしょっちゅうあった。僕が覚えているのはみんなが走り回ってボールを拾ったときに、ちょっと大谷さんが横から出てきてポンと蹴ると点が入ると。また入れられと、また出てきて得点が入ると。僕はずっと記憶をしていたんですが、もう一度商売柄古い記録集を全部調べてみたら、5年生のときも、4年生のときもそんなにたくさん点をとってないんですね。ただよく調べてみると、非常に大事なところ、同点にならなあかんとか、決勝ゴールとか、そういうときはやはりきちきちととってるわけ。大谷さんの1年下には上手いのが沢山いましたから、むしろその先輩連中が点をとってる記憶はあるんですが、むしろ得点としてはそっちの方が多いのかもしれませんが、現実が一番大事なところの試合はとってる。

当時は師範学校と試合をしますから、師範学校は年齢が2つ上になります。高等小学校から来ますから。そうすると年齢のハンディと体格が師範学校の方がしっかり身体も練れていますから、なかなか勝てないんですけど、神戸一中はショートパスとかいろんな技術的な問題を解決して活用になったんですが、全国大会での天王寺師範との決勝でも決勝ゴールは大谷さんですね。というような選手でした。

当時私の隣家に金子彌門というサッカー部の副キャプテンがいました。牛木さんをご存知でしょうけど、のちにパ・リーグの事務局長をやった福島さんというのがいて、これは毎日新聞から行ったんですけど、神戸一中の陸上競技部で断然強かったんですけど、金子彌門というのはそれよりも1万メートルを走っても強かった。それが、彌門さんは夏の大会の後、冬のラグビーの試合に出場して、全国大会の決勝まで行って負けたんですが、もし優勝していれば、金子彌門という名前は日本の高校ラグビーのチャンピオン、高校サッカーのチャンピオンの歴史の中に、両方の競技で優勝したケースに残るはずだったんですが、残念ながら決勝で負けたもんですから、彼、金子彌門さんはサッカーだけのチャンピオンに残っているんです。

金子さんはロービングセンターハーフのときのセンターハーフですからすごい働きぶり、その人がいつも言うのは、自分らが走り回って、ボールを拾い回って、もうとにかく一生懸命汗をかいてやっているけど、さあいう時になると大谷がすっと出てきて、ポンと蹴ったら点が入ると、なんかがっかりするけど、といて彼がおらなんだら勝てへんのやからな。そういう不思議な選手でした。シュートはやっぱ、僕はずっと一緒にプレーしましたからよく覚えていますが、非常に長い足をきれいに巻き込んで、非常にきれいなインステップで点を決める選手でした。シュートの形がきれいだし

たね。

戦後一度、京都で大谷さんと試合をしたときに、まだ新聞社に入る前で適当な暮らしをしていたんですけど、その頃一緒に暮らしていた流（ながれ）政之という、今世界的な石の彫刻家でピカソ、マチス、流かと言うニューヨークタイムスに載るくらいの、その流が試合を見て、試合がすんでからあの人は上手いのかと言うから、ああ大谷さんか、いや見たら分かる上手いやろ、なんで分かるねと聞くと、形がきれいやと言ってました。やはり大芸術家は形で見るんだな、その頃まだピーピーで大芸術家の卵でしたけど、今、昔のことを思い出すと、その話が非常に印象的でした。

そういう点取り屋でして、東大でも一高でも点はとってました。昭和16年の関東大学リーグは早稲田と東大両方が優勝かな、17年は東大が優勝でしたね。どちらかの年度、16年の時でしたかね、朝日の天藤明という記者が書いたものの中に、今年のリーグは二宮洋一たちが卒業して全体にレベルは落ちたけれども、早稲田の裴宗鎬（はい・そうこう）と大谷四郎のシュートが素晴らしかったと書いています。そういう点をとることの上手だった選手でした。いわば、やたらに走り回ってどうということではなくて、物事の勘所をつかむことの上手い人だった。それはサッカーだけでなく、いろんなところに生きたと思います。指導にもそういう点がありました。

大谷さんはのちに新聞記者になるんですけど、新聞記者になって仕事の傍ら元気な間は指導者としても身体を動かし、自分でプレーして見せたりしました。それで、やたらに走り回るというムキではなくて、ボールテクニックを強調するというだけでなく、非常に全体的に試合全体を見ることができる選手になってほしいと、というような考えをよく言われましたね。もちろん個人技術は大事だけれどということ。

ここは話が飛びますけど、大谷さんのもう一つの仕事は若い今の長沼、岡野、平木、三村といった戦後の、戦後というよりも日本のサッカーを東京オリンピックからそのあとずっと引っ張ってきた一連の世代を、1953年に西ドイツのドルトムントであった国際大会に送り込んだんです。お手元にドルトムントの話が20年ほど経ってから75年、74年のときのサッカーマガジンにもう一度昔のことを思い出して、書いておられるのがあります。7月から9月までヨーロッパを2カ月ほど、若い日本のサッカーの選手たちがあちこち行ってサッカーだけでなく、パリではムーランルージュまで行ったり、あるいはルーブルまで行ったり見分を広めて帰ってきた。大谷さんもノコさん（竹腰）も若い連中にヨーロッパを見させて、将来日本のサッカーを背負ってたつ人間を作りたいというのが、これです。その時のドルトムントの試合の様子が、試合の後に第1戦でドイツと激しい試合をして、惜しくも敗れて、宿舎に帰ったときに、みんなが食堂へ入ると、日本の学生の代表チームを見て、スタンディングオベーションで迎えてくれた。その時に初めて岡野俊さんや長沼健さんたちは、このことが自分たちのスポーツ、サッカーに一生関わっていく原因になったと、岡野さんも長沼さんも書いておられます。その大会に竹腰重丸団長、慶応の松丸貞一さん、大谷四郎さんが役員として同行された。大谷さんのすごいところは向こうで買った新聞をきちんと自分でスクラップしてファイルして今も残しておられることです。ドルトムントの小さいスタジアムですが3万人入ったという新聞の写真があります。これはたまたま2006年のワールドカップで私が行ったときに、実は写真を撮ったんですけどね。例によって今、探したらどこにあるかよく分からないので、持って来ていませんが。

でかいスタジアムの横に小さいスタジアムがあって、そこが健さんや俊さんが試合をしたところで、今度の大会の時はそこが、テレビの自動車置き場になっていました。そのうちにウチのブログにもその写真は載ると思います。そういうところで、四郎さんたちの雄大な外遊計画というものが、日本サッカーリーグを作り、Jリーグに至る一連の中心世代を育てた1つのきっかけだったと思います。

大谷さん自身はこういう資料の整理に非常に几帳面な人で、後にサッカーマガジンではワールドクラスに向かうためには、「悠々と急げ」というような洒落た題をつけて、書いておられます。家庭では、いつも息子たちに細かいことを言わないおおらかなお父さんであります。しかし、非常に几帳面で先を見て一つひとつを押えていくことに関しては、ちょっと類のない人だったと思います。それは、中

条さんに言わせれば、神戸一中—高—東大で、もう一つそれに付け加えるなら、海軍経理学校ですよ。東大を出たところで、海軍主計になるというのは非常に難しいんですよ。海軍経理学校を出て、ラバウルに長い間駐在されて、後の身体の健康には悪かったかも知れませんが、そういうエリートを経て、それで朝日新聞ですからね。全部その道では一流ですから。それをたいして苦勞をしていないように見えながらスースーと入学試験も入社試験も入っていく。僕が産経に入った時に、朝日の運動部の人たちが、ああ大谷君の後輩かというようなことを言ってくれるわけです。僕は、大谷さんの自分の好きなことをやっておけよ、というんじゃなくて、野球も何もかにも全部顔を出して取材に行きましたから、違う種目の連中が全部大谷さんの話をしてくれるんですよ。それが面白くて、経歴も家柄も言うことはない。入社試験の成績も良かったらしい。だから、あの新聞は読売さんや産経と同じかどうかは知りませんが、あそこは住友銀行と一緒に、あるいは官僚と一緒に、入社試験のときの席次が重要ですから運動部の他の連中に言わせたら、大谷さんが入ってきたときには編集局長か、役員候補が入ってきたとみんなが言っていたそうです。会社のお偉方のお嬢さんをもらえという話も当然出たらしい。そういう話もあったくらいで、入った時から注目されていた。それが、スポーツだけをやると。最初、岐阜の支局に回った時に特ダネを1つ持って帰ります。その特ダネも、いつも大谷さんが役所に顔を出しても、何も仕事をしているような顔をしないものだから、大谷さんのいるところで平気で人事の重大な話をしてしまったので、さすがに聞きもらしたら損だと、それが特ダネになったという笑い話がありました。

あまり物事にこだわらないとみんなから思われているほど、大らかでした。ですけども実際は細かく気をつけられるし、几帳面でした。その几帳面さがどこに出てくるかというと、考えて組み立てていくときに出てくるわけです。東京オリンピックの前に私どもが兵庫サッカー友の会というのを作りました。神戸でそれがスタートして、それを今度は翌年1964年に、アルゼンチンに勝って、たった1勝でしたが、日本中ひっくり返るように喜んだ。サッカーがですよ。新聞もメディアも一緒に喜んでくれた。それはメディアが世界中をオリンピック前に飛び回って取材したら、ブラジルはサッカーが盛んだとか、ドイツは強いとか言っているけれども、新聞記者が社会部も運動部も飛び回って世界中取材したら、結局世界ではサッカーが一番盛んだということがみんな分かって帰ってきたわけです。ですから、アルゼンチンに対する1勝がどれだけ大きいかが分かって、みんなデカデカ書いてくれたわけです。そのあと、神戸で大先輩連中が集まってどうしようかと言うから、僕がうっかりと、今の子どもは59年の第1回アジアユースについて行ったけど、全然みんな下手ですよと、子どもの頃に蹴ってないからね、という話をして、少年にサッカーをやらすべきだ、やってはどうかと、うっかり言ったもので、翌日朝加藤正信先生から電話がかかってきて、昨日のあの話な、あれやろうやないかという話が起って、神戸少年サッカースクールというのをはじめて、その時に大谷さんが一緒に色々考えを教えてくださいました。いよいよ少年スクールが盛んになってやっていくときに、少年スクールではダメだと、スクールということを言い出すと、みなが習うものだと思うから、サッカーは慣れるものだから、スクールではなくクラブにしよう。クラブというのはわれわれはこどものときにKR&ACにしょっちゅう試合に来ていましたから、クラブというものは、こういうちゃんとグラウンドもあって家もあって、みなが集会してワイワイ言いながら、楽しむものだと思っていましたけど、何もできないけどとりあえずスタートしよう、事務所を加藤ドクターのところ借りてやり始めた。クラブをやろうと言ったときに、さて会員の登録をどうしようかとみんなが考えたのは、われわれはヨーロッパ風のクラブだからというふうに考えて、そこで大谷さんは年齢別登録というのをこのクラブで実行していこうと最初に言い出した。なぜ年齢別かというと、このクラブはサッカーをするために集まった。だからサッカーをすることが一番、それ会員になった。みんなが自分たちのお金を出しあってサッカーをするわけで、ここでは社会的身分と言うのは関係ないんだと。サッカーをすることが第一義で、そうすると日本の子どもたちは、小学校、中学校、高校、大学、社会人というふうに、学生でも高校、大学という社会的なライン、グループがあります。社会的なものでなくて、

子どもは成長していくわけですから、ヨーロッパでなぜそれをやるかと言ったら、12歳以下、14歳以下、16歳以下、18歳以下とするのがまともなんだと。ヨーロッパがそうしているから、やっただろうということではなくて、社会的身分で区別する方がおかしい。ここはスポーツをしにくところだから、スポーツをするために成長に合わせた年齢で区分していく。最初の神戸FCは中学生という言い方をしていました。というのは、中学までは義務教育ですから、高校年齢から18歳以下ということにしてしまおうと、スタートしたわけです。この考え方でずっと押し進めて、これがやってみたら、一番まともじゃないかということで、それを日本協会の方に、こういうやり方でどうか、一応われわれはこういうひな型を作ってみただけだと提唱した。これは加藤ドクターが次のクラブなんか評議会のときに言い出した。その理論、理屈の元は大谷四郎さんがこういう言い方でみなをリードしてくれた。

毎日新聞の記者だった岩谷俊夫君はサッカーの仲間で3人も神戸一中出身で、大谷さんは大先輩ですけど、いつも3人で寄って色んな話をするときに、いろいろ仕事の分担をいていくわけです。ここで理論づけしておかんといかんと言ったら、岩谷が「大谷さんに任せておいた方がいいよ」と小さい声で言うくらいで。それくらい大谷さんの筋論というのはきっちりしておりました。まあ、そういう大谷さんは自ら朝日新聞にはたくさんいい記事を書かれたから、それについてはまたブログでも、アーカイブで見させていただいてもいいと思います。資料の中には年齢別のこともかなり詳しく書いてあります。これについては、ウチのサッカーライブラリーの中に入っておりますので、詳しく読んでいただきたいと思います。

大谷さんは、いわゆる社会人として一番大事な50から60歳にかかる頃に視神経の方に影響のある病が出て、それで苦勞されたんですけど、治るたびに出てこられて神戸FCの事務局をやっていただきました。1970年に神戸FCを社団法人にしようと、法人格をもつクラブをなぜ作るか、というと、僕はもっと簡単に法人格にして学校の先生くらいの給料を払わないことには、今までのようにボランティアでやっている間はいろいろ大変だと、中心になるコーチを呼ばないかん。それはある程度の収入を得てもらわないといけな。そのためには、誰がやっているか分からんのではなくて、ちゃんと社団法人格にしようと加藤正信先生たちが言い出した。そのときに筑波大を出て来てくれたのが、黒田和生先生であります。

黒田さんは最初にやってきて、いきなり言ったのが、私は岡山でもサッカーをやってきましたけど、あだ名は牛と言われてます。だから、すぐには何かできるかどうか分かりません。じっくり見ていただいたら、なんとか頑張ります。こういう話でした。決して自分はなんでもできるとはおっしゃらなかった。今、その成果が神戸に表れています。大谷さんは黒田和生という人間をゆっくりと見ながら色々アドバイスもしてくれた。僕はその現場をあまり見ておりません。神戸フットボールクラブは紆余曲折があって、なかなか大変であって、今も続いているということはすごいことなんです。

大谷さんが先を見るということの一つに、ある時期にクラブを馬車馬のごとく、あるいは機関車のごとく引っ張っていかれた加藤正信先生が副会長になられて、大谷さんが事務局長になってもらった。大谷さんはその頃いろいろ仕事をされていたんですが、一部の噂では加藤正信先生が祭り上げられているというような声が他のクラブに届いていたかも知れません。それは今考えると、なんでもできる加藤正信大先生が機関車のごとく突進してやっていった。しかし、いずれは加藤先生も大谷四郎も賀川浩もみんなそのうちにそういうことができなくなるだろう。それを組織としてやっていくのには、普通の人間が組織としてやっていくのには、加藤正信先生なくてもできるような形にしないと、このクラブは存続しないだろう。そういう苦勞は宮川さん（枚方FC代表）が一番よく分かっておられると思いますが、そういうことを大谷四郎さんは考えられたんです。あとから考えてみると、ああやっぱりそういう手を打ってきたんだと、この頃僕は80歳を越えてやっと分かってくるような先輩であります。長くなりましたが、こういった大谷さんのことを語り合っただけだと思います。

2. 黒田和生： 神戸FCでの弟子から見た大谷さん

黒田：大先輩もたくさんいらっしゃって、休憩があったら、その間に帰ってしまおうかなと思うくらい(笑)、すごい雰囲気を感じています。先ほどから背筋が伸びっぱなしで、身長が5センチくらい高くなったかな、という感じです。さきほどご紹介いただきました、牛の黒田でございます。

高村光太郎さんの「牛」という詩が大好きで、学生時代に会ったもので、大変長いものですが、時々読み返したり、神戸FCの卒業式で選手に渡したりしています。

先ほどから振り返ってみても、とんでもない神戸に来たな、と思っています。もちろん、後悔はありません。自分の人生のなかで、よかったと思っています。

親戚や、友人や、先輩も誰もいないところへ飛び込んできたということで、そこへ先ほどからお話に出ていた、加藤さん、大谷さん、賀川さん、それから北川さんのお父さん、そしてもうおひとり空野さんという甲南幼稚園の校長先生が常任理事をされていました。空野さんには私の家内の就職までお手伝いいただいて、神戸FCより数段給料の高い小学校の先生をさせていただいて、大変感謝しております。

その常務理事会がだいたい夕方の8時と9時に始まって、終わるのが11時頃というような会議で、5人が話し出すと止まらない熱い会議で、なんでこの人たちはサッカーでこんなに盛り上がっているのかなと思ったことを覚えています。電車がなくなろうが、どうなろうが関係ない。それこそ賀川さんなどは会社が終わって大阪から駆けつけてきていただいて、というようなことが着任早々の2、3歳のころで、インパクトがありました。大学を創業したてのころで、上田先生よりも髪の毛もありましたけど(笑)、見るものすべてがサッカーの本物、というか、神戸中央があつて、神戸高校でもスクールができるようになって、それまでは葺合高校とかを使っていたんですが、神戸高校で大谷コーチによる、職員の技術練習をやりました。朝に学校をやっている間に、職員5、6名がまず技術が出来なければだめだということで、戦術に走る傾向があるけども、子供にとって一番大切なのは技術で、それを指導できなければだめだということをよく言われました。その傾向は、いまも少年サッカーの指導者に対して危惧しているところでもあります。戦術、フィジカル、メンタルに目が向いている傾向があるように思うのですが、そこで技術が大事だと言って模範は見せることが出来ても一人ひとりに合った止め方、蹴り方がチェックできないという指導者が増えていることに、生意気ではありますが、心配をしています。

先ほどから回覧されている、KFCニュースを職員が順番に書こうということになって、書いたはいいんですが、添削、添削の連続で、まあプロの記者にチェックされるんだからしょうがないよな、と言いながらも原稿を書くことを鍛えられました。そのことが後々役に立ったことは言うまでもありません。

先ほどクラブユースの話でも名前が出ていた、加藤正信先生の息子さんで、私の2つ下の加藤寛さんの話も聞きたいということも提案させてもらっていたのですが、日経新聞にも取り上げられた大人のサッカー教室---大人の教室と言ってもサッカー教室ですよ---をやってくれているので、今日は残念ながら不参加ということになっています。

大谷さんは、事務局長として来られて、大変お世話になったのですが、ドルトムントの話はよく聞かせていただきました。平木さん、岡野さん、長沼さんたちをいろんなところに連れて行ったということで、スイスではトロッコに乗ってユングフラウに行ったとかも聞きました。その話を私も覚えていて、小学生や中学生を遠征に連れて行ったら必ず時間の許す限り名所旧跡を心がけました。その話は偶然に上田亮三郎先生が講演のときに同じようなことをおっしゃられて、私もそれを受け売りしているんですが、代表クラスになればなるほどホテルからピッチ、ピッチからホテルとバスに乗って行くだけ、試合するだけ、行った街のことも全然知らないというような遠征が増えているのを心配しています。せっかく海外に行ったけど飛行機から何からすべて手配してもらって、ホテルから出たらあ

かん、というようなピッチ上のことだけを言われているというようになってしまっている。ヴィッセルや滝川第二でも行きましたが、極力いろんなところに連れて行くように意識しています。

登録制のことで、長沼はあかんとか、岡野は何もわかってないとか、要するに大谷さんが考えたプランに対して、別れ際に「次には改善しておきます」と言うんだけど、次に行っても何も話が進んでいない、というようなことをよく事務所でぼやいていました。あいつらはあかん、という話を聞いたたびに、私らはしめしめと思うわけです。何がしめしめかと言うと、岡野さんや平木さんがあかんのやったら、私が一番弟子のチャンスやな、と（笑）。という野望を、恥ずかしくて口にも出来ないですけど、一番弟子になれたらいいな、という想いで机を並べさせていただけにいました。

その時、私は小学生をみていたんですが、大変弱いチームで、何年かすれば岡くんがまだ学生のころから職員なりたての頃に全国大会にも行ったことがあります。当時は弱くて、神戸はシニアのねりんピックとかでOBは活躍するんですが、彼らから小学生は何やってるんだ、清水や厚木や広島に負けっ放しやないかとOBから叱責をいただいたりしていました。プロコーチがみているのに、そんなに弱いのか、と。我々はおめんなさいと謝っていて、まあ選手のレベルも低かったかなというもあるんですが、大谷さんはいつもフォローしてくださって、いつも聞かされていた言葉が、「前進こそ勝利」ということでした。少年サッカーにおいては前進すればいいんだ、勝利は二の次、三の次で、前進していればいいんだということでサッカーマガジンにも書いてくれたことがありました。我々職員はその言葉を胸に秘めて、でも前進って何なんだ、と。前の試合で3点取られた相手に、今度は5点でそれが前進か？ということもあります。内面の前進もあれば、いろいろな意味で深い言葉だなと今でも思っているんですけど、そういう声をかけていただいて、ずいぶん勇気づけられました。

ほんとに、あの当時と言ったら失礼なんですけど、サッカーは遊びだなんて言ったら石やヤリが飛んできそうな時代に、枚方の近江さんとかと高いレベルで意識が同じで、遊びからいい選手が出てくるんだ、ということをおさかんに強調されていました。そういうことが本当にわかったのは、私も後になってからで、もっと早くわかっていたら、違うアプローチもあったかなと反省もしています。結局神戸FCには13年間お世話になったんですが、忘れもしないのは、7年目か8年目、私が指導について悩んでいるときに、大谷さんがマンツーマンで君の指導について話をしたいということで、2、30分話をしたことがあります。その時に、ズバツと言、「君の指導は甘い」ということを言われまして、ぼくは子供に対しては甘い方がいいと思っていたので、はいそうしているつもりです、と思わず言ってしまったら、「だからダメなんだ」とすごく怒られたことを覚えています。甘くするのと、真剣に子供のことを考えるのと、遊ぶのとは全然違うんだということをお言われました。あと何を言われたのかほとんど覚えていなくて、ただ甘いと言われたことが頭に残って、肝心なことを聞き逃したかなと反省しています。

13年お世話になって、滝川第二という新しい学校に行ったんですが、神戸FCに恩返しをしなきゃ、という想いで滝川第二でがんばらせてもらいました。また滝川第二時代には、大学関係では上田先生はじめたくさんの方にお世話になりまして、無事、中退することができました。ヴィッセル神戸でも、現場にも再び立つ機会を与えてもらって、当時の大谷さんのような監督ができたらいいなと今でも思っていますし、一番弟子は私だと胸を張って言えるコーチになりたいなと思っています。また、今日はたくさんの方とふれあえてうれしく思います。ありがとうございます。

■ 質疑応答

喜田：私は大谷さんに教えていただいたんですが、当年取って51です。身長ちゃいますよ（笑）。12歳から神戸FCに入っていまもずっとやっていますが、当時新聞記者ということは存じ上げなかったの

ですが、海外で買って来られたと思われるトレーニングウェア来て、シューズは白に黒のライン。あんな粋なカッコのコーチはおられなかったですよ。それでインステップキック、まさにきれいなキックでしたよ。守るときには我々が教えてもらったのはWMなんですけど、つるべの動きをグラウンドに絵を描いて教えていただきました。当時は決まったグラウンドがなくて、ジブシーみたいなもので、神戸高校と、磯上はぼくが高校のころは端っこにまだ芝が生えてました。昔は全部芝生やっただけですよ。それから神戸大学でナイターで練習させていただきました。当時のユースチームははっきり言うてレベル低かったです。神戸高校はじめ、報徳、西宮東、それから関学ですか。ユースになんてええ選手はこないんです。ぼくがなんでユースに入ろうかと思ったかという、神戸高校に友達がいって、練習をのぞいたら、こんなやったら殺されるということになってその辺歩いてたら、神戸FCの看板が出て、そこに入るようになりました。日本代表になった人と一緒にプレーしたり、加藤正信先生、大谷さん、たくさんの偉い人たちに教えていただきました。ほんとにありがとうございます。

今西：先輩がゴールポストに藁を巻いて、キックの練習をさせていました。空手部に入ったんじゃないのに、と思っていましたが、1ヶ月ほど後に試合がありまして、なぜか私が試合に出たんです。広島大学附属高校と言って、当時非常に強い相手だったのですが、勝ったんです。そして試合が終わった後に「お前がマークしたの誰か知ってるか」と言われて知りませんと答えると、「あれは鬼武だ」と。今のJリーグチェアマンですね。広島で一番足が速かったんです。鬼武をマークしたんだから、お前はものになるよと言われて、空手の練習は終わりかなと思ったけど、空手の練習は続きました。そんな我々が選手だった時代に大谷さんはよくグラウンドに出てこられていました。当時のメディアのなかで、一番サッカーの経験もあるし、勉強もされている方だったのですが、11時まで会議されていたというのには頭が下がります。黒田先生の話にもあったように、遊びの中にサッカーがある、遊びのなかで上達していくということなんですけど、決して甘さがあるってはいけないという黒田先生と大谷さんの話を聞いていると、子供の頃から興味を持ってやると言うこと、でもその中でディシプリン、規律ということと同時に求めなければいけないということをおっしゃったんだと思います。

今の日本のサッカーはほんとにうまくなりました。4年ごとにレベルアップしている。でも世界のサッカーはそれ以上に進んでいる。そこで低年齢からの育成が大切になってきていますが、神戸FCはそういう意味で先駆者です。そんな先輩の話聞くことが出来て、今日は参加してほんとうによかったと思っています。ありがとうございました。

本多：ありがとうございました。最近、大谷さんのきれいにスクラップされた記事を読ませていただいて、当時の提言が今になってようやく実現していることもあるし、まだまだ出来ないこともたくさんあるということがわかりました。本日は若い指導者やライターの方皆さんも参加されているので、ぜひ大谷さんの夢を実現していただければと思います。貴重なお話を本当にありがとうございました。